

1 学校教育目標 夢や希望をもち、自ら学び、心豊かに、たくましく生きる児童の育成	2 本年度の重点目標 ①学力の向上を図る ②道徳教育・特別活動の充実と生徒指導の強化 ③健康・安全教育の充実 ④特別支援教育、人権・同和教育の推進 ⑤地域に開かれ、信頼される学校づくり ⑥健康で明るい教師が高きに和す学校づくり
--	--

達成度
 A: ほぼ達成できた
 B: 概ね達成できた
 C: やや不十分である
 D: 不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価							
①学力の向上を図る							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○教職員の資質向上	校内研究・校内研修の充実を図ることができたか	<ul style="list-style-type: none"> 各自年1回以上研究授業を実施し、授業力向上に努める。 教育センター講座及び研究発表会等へ1人1回以上参加し、自己研鑽に努める。 東部教育事務所等より3回以上研修を受け、校内研究・校内研修の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業力向上を目指した授業研究会を8回実施する。 研修後の報告の場をもち、新しい情報を共有する。 授業振り返りシートを活用し、日々の授業改善を行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 教師用アンケートの質問項目「私は、年1回研究授業を実施するなど、自身の資質向上を図っている」では、全教員が肯定的な回答をした。 教育センター講座及び研究発表会等へ1人1回以上参加し、自己研鑽を積み重ねることができた。 東部教育事務所指導主事から、学校の実態等を踏まえ、年間を通じた系統的な指導を受けることで、校内研究を深め、授業改善に活かすことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 今年度の全国・県調査等の結果については、実施学年の平均正答率が、ほとんどの教科で全国・県平均を上回った。年間を通して、校内研究を中心とした授業改善の取組の充実が図られた成果と考える。次年度においては、児童の実態を的確に把握し、今年度の取組を一層充実させていく。
教育活動	●学力の向上	基礎学力の定着を図ることができたか	<ul style="list-style-type: none"> 4教科(国社算理)単元ごとのテスト到達度を85%以上にする。 全国・県学習状況調査・CRTの結果で全国・県平均を上回る。 「算数が分かる」という児童を85%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 朝の会(健康観察・素読・計算タイム)を継続する。 合同計算タイムを2回開催する。 児童の実態に応じて習熟度別少人数授業など学習形態を工夫した授業を行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 4教科の単元ごとのテストの到達度は85%以上となり、目標は達成できた。 全国・県学習状況調査では、5年生社会科「思考判断」以外は、4教科・全領域において、全国・県平均を上回ることができた。CRTは、全学年で、全国・県平均を上回った。5年生社会の「思考判断」の領域においては、学習の充実を図る必要がある。 算数アンケートにおいて、算数が「分かる」「だいたい分かる」と答えた児童が90%以上であった。 	<ul style="list-style-type: none"> 基礎・基本の定着及び学習意欲の向上のため、朝の時間等を活用し、素読、合同計算タイム、脳トレ、算数・国語の補充学習、音読などの取組について、引き続き、児童の実態に応じて計画的に行っていく。 県調査やCRT等の結果分析について、次年度担任に引き継ぎ、児童一人一人に応じた指導の充実を図る。特に、県調査でも明らかとなった5年生社会科「思考・判断」についても同様であり、今後も指導の強化に努める。
		主体的学習習慣を育成することができたか	<ul style="list-style-type: none"> グループワークに進んで参加する児童を85%以上にする。 毎日の家庭学習の達成率を90%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業の中で互いの学びを伝え合い生かす場を設ける。 話し合い活動の目的を明確にし、積極的に活動できるようにする。 デジタル教科書やタブレットPCの活用を行う。 朝の学習タイムでタブレットPCを積極的に活用する。 「家庭学習がんばろう週間」を年5回実施する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 算数アンケートにおいて、約85%の児童がグループワークに進んで参加し、90%以上の児童が話し手の説明をしっかり聞いていると答えている。しかし、「聞く」に対して、「話す」ことができていないと答える児童もいるので、話し方の指導をする必要がある。 家庭学習は、ほとんどの児童が取り組んでおり、全学年において、概ね目標に達することができた。 家庭学習がんばろう週間を年5回実施し低学年60分以上、中学年90分以上、高学年120分以上の目標のもと、家庭と連携した取組が行えた。5回の週間では、全学年が目標時間を概ね達成できた。 家庭学習がんばろう週間後に、保護者へのお便りを作成し、結果だけでなく、家庭学習の方法等について掲載し、家庭での意識向上等を図った。 	<ul style="list-style-type: none"> グループワークを行う時のモデルを全職員で共通理解し、学年に応じた系統的な指導となるようにする。 自主学習の課題を提示したり、学習内容に合ったノートの書き方を指導したりするなど、自主学習の具体的な方法を指導する。また、モデルとなる自主学習の内容を掲示したり、その内容のよさを児童や保護者に示したりするなどの手立てを充実させる。
		学校図書館を十分活用することができたか	<ul style="list-style-type: none"> 年間読書冊数1人100冊以上(1～4年生)、70冊以上(5・6年生)の達成率90%を目指す。 子どもたちが、読書に関心を持つような啓発環境の工夫を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 読んだ本の冊数が視覚的にわかるような表を作り、掲示する。 読書タイム、おすすめの本コーナー、図書館便りを活用し、読書に対する意欲をもたせる。 図書館祭りをし、本に対する興味・関心を高める。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 1月末までに、90%以上の児童が目標読書冊数を達成することができた。図書委員会を中心とした取組等で、児童の読書の意識が高まった。また、図書が電算化されたことで、本の貸し借りが簡単になったことも、その原因と考える。 図書委員会の企画を取り入れながら、イベントを開催することができた。また、図書館司書との連携により、全児童が目標読書冊数を達成できるように、児童や職員に呼びかけをした。 	<ul style="list-style-type: none"> 年間読書目標冊数については、次年度も、今年度同様、1～4年生は100冊、5・6年生は70冊が適当である。 全体的に、1学期の本の貸し出し数が少ない傾向にあることから、次年度は1学期から児童の読書意識を高めるような取組を行う必要がある。
	○教育の質の向上に向けたICT活用教育の推進	ICT機器を授業等で効果的に活用できたか	<ul style="list-style-type: none"> ICT機器を活用した参観授業を年間2回以上実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 1日1回は、ICTを活用するように先生方に働きかける。 スーパーティチャー(ICT)を招いた研修を行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 目標である「ICT機器を活用した参観授業を年間2回以上実施する。」については、全職員が行うことができた。参観授業では教員一人一人の活用の仕方等を学ぶことができ、更なる授業改善につながった。 学校評価の児童用アンケートでは、「電子黒板を使った授業はわかりやすい。」と回答した児童が、第1回目96%、第2回目98%と高い水準を示した。 保護者も、ICTを活用した授業に効果を感じており、教師も日々、ICTを効果的に活用しようと努めている。 具体的方策である、ICTのスーパーティチャーを招いた研修を行うことはできなかったが、他校で行われたスーパーティチャーの研究授業に担当が参加し、職員への周知を図った。 	<ul style="list-style-type: none"> ICT利活用については、ICTのスーパーティチャーを招いた研修会を行うなど、年間指導計画を作成するなどのプログラミング教育への対応も適切に行い、本校の実態に応じた実践を積み重ねていく必要がある。

②道徳教育・特別活動の充実と生徒指導の強化を図る							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○特別活動	・児童の主体的・実践的な態度の育成に努めたか	・委員会での企画・立案による、年1回以上の自発的な活動の実施を目指す。	・委員会において、自発的な創造工夫のある活動を推進し、活動を紹介する場を設定する。	B	・各委員会でも年1回以上、全校に関わる活動・集会等を企画し実践することができた。 ・児童に気付かせたり考えさせたりする場を意識して設定したことで、委員会活動に積極的に活動している児童が増えたと全職員が実感している。 ・委員会の意義・目的について、低学年児童への学びも意識し、委員会紹介集会を11月に設定した。集会では、活動内容等の紹介やお願いのお知らせを行い、学年に応じた委員会活動への理解等が深まった。 ・学級活動の中で、どの学年も、話し合い活動を年5回以上実施することができた。 ・低学年は、学級活動(話し合い活動)の際に、前半の教師主導から、後半からは段階的に児童に役割を与え、児童自身が学級会を進めて行けるようになった。	・開発的生徒指導の理念を全職員が理解し、委員会活動や係活動などにおいて、「出番・役割・承認」の取組の充実(これまでの取組の整理、ボランティア活動の設定等)を図り、児童一人一人の自己肯定感を高め、主体的・実践的な態度を一層育成する。 ・特にボランティア活動については、次年度から校務分掌として担当職員を明確に位置付け、その取組を充実させる。 ・低学年から、主体的に話し合い活動を行う力を身に付けるために、1年間を見通して、教科等横断の視点で計画的に指導を行う。
	●心の教育	道徳教育の充実に努めたか	・道徳の参観授業を全学級1回以上行う。 ・2月13日の「命を考える日」の集会を、一人一人に命の大切さを考えさせる機会として活用する。	・ふれあい道徳の実践を通して、保護者と連携する。 ・命を考える日の前までに、学級で命の大切さについて扱う授業を実施する。	B	・担任に、授業参観での道徳の授業公開を呼び掛け、全学年において年1回以上実施することができた。保護者アンケートにおいても、道徳教育が思いやりの心を育てる上で効果的であるというよい評価が得られた。 ・「命について考える日」の前後に、生命尊重に関わる授業を行ったことにより、命は大切にかけがえのないものであること等を、実感させることができた。掲示物などの学習環境の工夫が課題である。	・ふれあい道徳や日頃の授業において、保護者が感想を書いたり、保護者も考えたりする題材を設定するなどして、学校・家庭の協働(共に学び、共に育てる)の意識の喚起・向上を図る。 ・「命について考える日」を実施するにあたって、年間計画を見直し、「天建寺渡し船転覆事故」に関する内容を中心に、「自分だけではなく、他者の命を大切にすること」や「だれとでも仲良くすること」などが伝わる掲示などの見える化を行うなど、学習環境を整える。
③健康・安全教育の徹底強化を図る							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○危機管理	多様な事象への対応ができたか	・避難訓練を年3回実施し、危機に対して円滑に動く体制を作る。 ・児童の登下校の様子を、学期に1回以上の登下校指導により把握する。	・避難訓練を徹底することで、平時の危機管理意識を高める。 ・避難訓練のうち1回は、休み時間に行う。 ・不審者情報や緊急事案発生の際に、学校情報携帯メール配信を確実に行う。	A	・避難訓練を年3回実施した。3回目は、児童への予告なしの避難訓練とし、立案の際、様々な事態を想定して、職員間の動き等を共通理解した上で実施することができた。 ・児童の登下校の様子を、学期に1回は、地区担当者が引率しながら観察し指導することができた。また、近隣に不審者事案等が発生した際も適宜行うことができた。	・避難訓練については、出火場所を前年度と変更したり、避難袋を使用したりするなど、内容を改善し、児童はもとより職員の危機意識や実践力を一層高める。
教育活動	○安全教育の徹底	安全指導の徹底に努めたか	・登校の様子の振り返りを月1回実施し、安全に登校する意識を高める。 ・自転車乗車時のヘルメット着用率100%を目指す。 ・防犯ブザー携帯率100%を目指す。	・毎月1回、一斉下校時に「登下校振り返り」を地区ごとに実施し、状況把握と指導を行う。 ・生活朝会等でヘルメット着用を確認する。 ・防犯ブザーの携帯状況を月に1回確認する。 ・年に1回以上は親子通学路点検を行い、危険箇所マップを再点検する。	B	・毎月1回の地区ごとの登下校の振り返りについては、実施できない時もあったが、全校一斉下校時や学級において、安全指導等を行うことができた。 ・ヘルメットの確認や防犯ブザーのチェックは、毎週水曜日の一斉下校時に、確実にを行うことができた。児童用アンケートでも、ヘルメットの着用や防犯ブザーの所持を尋ねる項目で、ほぼ9割の児童が「できている」と回答した。保護者アンケートでは、「できている」と回答した保護者が、7割程度であることから、児童の地域での実態を十分に把握し、学校外での防犯ブザーの所持や、長期休暇中のヘルメットの着用について、地域、家庭と連携した指導を強化する必要がある。	・登下校や休日時の地域での安全に関する状況について、安全担当を中心として、日々状況把握に努める必要がある。 ・毎月1回の地区ごとの登下校の振り返りははじめ、一斉下校時の指導についても、児童や地域の実態に応じた下校指導を行っていく。 ・ヘルメットの着用や防犯ブザーについては、各種会議やお便り等を活用した保護者・地域への啓発とともに、学級指導の時間を中心とした安全教育の充実を図る。 ・ヘルメット着用強化週間を設定したり、長期休暇中のチェック表や職員の巡回の取組を検討するなど、指導方法を工夫する。
	●健康・体づくり	望ましい生活習慣の形成に努めたか	・「早寝・早起き・朝ごはん」の啓発を年に2回以上行う。 ・給食後の歯磨き100%を目指す。 ・むし歯保有率を20%以下にする。	・生活リズムアンケートを年2回実施し児童に意識づけを行う。 ・生活リズムアンケート結果を便りに載せ、保護者の関心を高める。 ・歯磨き指導を行う。歯みがき強化期間を設ける。(6/4～) ・長期休業中は、歯磨きカレンダーを活用する。 ・歯の検診結果う歯保有の児童に、年に2回 病院受診を勧める。	A	・「早寝・早起き・朝ごはん」については、健康教育に係る全体・年間計画に基づいて指導の充実を図った。また、寒さに負けない生活やインフルエンザの予防についても、継続的に取り組み、年2回以上の啓発は十分に達成できた。保健だよりでも、適宜、「早寝・早起き・朝ごはん」やインフルエンザ等の感染症予防等についても啓発を行った。 ・給食後の歯磨きは100%実施できた。歯と口の健康週間に合わせて、歯みがき強化週間に取り組んだり、1、2年生の「歯ッピー教室」で、ブラッシング指導を受けたりしたことで、食後の歯磨きの大切さについて、児童の意識を高めることができた成果と考える。特に2年生は、親子で歯磨きをして、磨き残しを保護者が確認し、家庭での歯磨き指導の参考にした。長期休業中には、歯磨きカレンダーを活用し、家庭での取組を充実させる手立てをとった。 ・歯科検診の結果、6月と12月に2回治療勧告を配布した。その結果、むし歯の受診率は53%、1月末のむし歯未治療者(むし歯保有率)は9.2%となり、20%以下の目標を達成できた。	・心身の健康の基礎になる基本的な生活習慣については、あらゆる機会を通して指導していかねばならない。児童にも親しみがある「早寝・早起き・朝ごはん」に継続的に取り組んでいきたい。 ・給食後の歯磨きは定着しているが、その内容の充実のため、鏡を使って磨いたり、適切なブラッシングの方法を身に付けたりするような指導を行う。
		運動習慣の改善や定着に努めたか	・体育的行事では、できるだけ児童の主体的活動を入れるようにし、運動習慣への意欲・関心を高める。 ・なかよしタイム等において、児童の主体的な活動を10回以上行う。	・児童の自主性を活かした運営で運動会・縄跳び大会を計画する。 ・佐賀県が推進している「スポーツチャレンジ」に1回以上参加し、運動能力を高める。	B	・学校評価の児童アンケートでは、全校児童の96%が「運動に進んで取り組んだ」と回答した。 ・体育大会では、各種活動に粘り強く取り組む児童の姿は見られた。今後は、競技種目やその内容等について、児童に考えさせる手立てをとりたい。 ・なかよしタイム等において、児童同士で運動内容を話し合い、実践する機会を10回以上行うことができた。 ・スポーツチャレンジには取り組みなかったが、水泳大会や縄跳び大会、なかよしタイムを通して、児童一人一人に目標を持たせたり、団体の種目を設定して目標を持たせたりすることで、運動への親しみや意欲、仲間づくりを行った。	・運動への親しみや意欲、仲間づくりのために、体育大会、水泳・縄跳び大会、スポーツチャレンジの取組を通して、児童一人一人に目標を持たせ、出番を設定するなど体育的な活動を一層充実させる。

		望ましい食習慣と食の自己管理の育成に努めたか	・朝食の喫食率100%を目指す。 ・給食の残菜0を目指す。	・生活アンケートを行い、朝食の内容に関心を持たせる。 ・アンケート結果の考察を保護者に配布する ・給食の残菜調べを学期に1回行い、好き嫌いなく食べることへの意識化を図る。 ・栄養教諭によるTT授業を行い、意識を高める。	B	・朝食の喫食率は、97%であった。目標の9割以上を達成できた。 ・給食の残食率は0.7%であった。目標の9割以上を達成できた。	・生活アンケートや年間を通じた授業実践を通して、朝食に関心を持たせ、アンケート結果考察等を保護者へ知らせるなどして、朝食の大切さや規則正しい生活習慣づくりへの意識と実践力を高めていく。 ・給食の残食調査を学期に1回行い、児童・職員の意識化を図る。更に栄養教諭によるTT授業を行い、バランス良く食事を取ることの大切さ等について指導する。
--	--	------------------------	----------------------------------	--	---	--	--

④ 特別支援教育、人権・同和教育の推進

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	●いじめの問題への対応	いじめの未然防止・早期発見に努めたか	・生徒指導連絡協議会等で、気になる子どもについて、確実に情報共有等を行う。 ・学校が楽しいと答える児童を90%以上にする。 ・「なかよしアンケート」の月1回の実施を目指す。 ・校内就学支援委員会を年1回以上実施する。	・気になる子に配慮するとともに、全職員で育てる体制をつくる。 ・専門機関(SC、SSC等)との連携を図る。 ・毎週の連絡会等を活用しながら、随時、児童の実態把握と指導についての共通理解を図る。 ・個別の支援計画・個別の指導計画に基づいた一人一人の特性に応じた支援・指導を実施する。	A	・生徒指導連絡協議会で、配慮を要する児童について、確実に情報共有等を行うことができた。 ・学校評価の児童用アンケートで、「学校が楽しい。」と答えた児童は全体の96%で、目標の90%以上を達成した。 ・「なかよしアンケート」を月1回実施し、児童の一人一人の悩みや学級の課題等への早期発見・対応に努めた。 ・配慮が必要な児童に対して、生徒指導連絡協議会以外でも、職員連絡会等を活用し、該当児童について適宜その対応について協議した、今後の対応について、全職員が共通理解し対応できるようにした。	・いじめについては、「どの子どもにも、どの学校においても起こり得る」ものであることを全職員が十分認識し、「弱いものをいじめることは人間として絶対に許されない」との強い認識を持つなど、いじめ問題に関する基本的認識を職員一人一人がもち、適切に対応するために、年度当初から研修の場を設定する。 ・いじめの早期発見・対応のため、生活アンケートの実施や日頃の観察、定期的な教育相談の設定など、児童一人一人の生活実態のきめ細かい把握を行う。 ・放課後等に時間設定をする等して、スクールカウンセラーや養護教諭との連携を強化する。
		人権教育の推進に努めたか	・人権集会を学期に1回以上行う。 ・縦割り班活動の充実を図る。 ・人権の視点に基づいた学習を各学級必ず行う。	・人権集会(6・8・11月)を活用し、人権意識を高める。 ・清掃や遊びの中で、自然に高学年から学べる環境を大切にす。	B	・児童会を中心とした人権集会や平和集会を、学期に1回以上実施することができた。今年は、「幸せの種」をテーマに思いやりのある言動について全校で考えることができた。 ・清掃やなかよしタイムなどの縦割り班活動を通して、子ども達同士の学年を超えた信頼関係や上級生の責任感・リーダー性を育むことができ、充実した縦割り班活動となった。 ・人権の視点に基づいた学習に各学級で計画的に取り組んだことにより、「友達の光る場所、良いところ見つけ」活動では、児童の自尊感情を高めたり、友達の良いところに目が向いたりする成果が見られた。	・人権・同和教育については、三校合同研修会での講師を招聘しての職員研修の実施や各学校の取組の情報交換を行うなど、小中連携を意識した取組を充実させる。

⑤ 地域に根ざし、地域に開かれた学校づくり

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○開かれた学校づくり	授業・行事等の公開に努め、家庭・地域の協力を得ることができたか	・学期1回のフリー参観デーを実施し、保護者80%以上、地域住民30名以上来校を目指す。 ・地域が参加できる行事を年に3回以上行い、学校の教育活動への理解を深める。 ・まちこみメールの保護者の登録率100%を目指す。	・フリー参観デーの広報活動を校区内の全世帯に行い、各種会合時に広報する。 ・各種行事についての案内を保護者及び地域に配布し、積極的に広報する。 ・全保護者に登録を依頼し、テストメール等で登録の確認をする。	A	・みやき町教育の日等にフリー参観日を設定し、保護者が来校しやすいようにした。保護者アンケートの「授業参観、学級懇談会、PTA活動などに進んで参加しているか」の項目では、肯定的な回答をした保護者が91%となり、実際に9割程度の保護者が参加し、目標の80%を達成することができた。地域住民は20名弱の参加であった。 ・地域が参加できる行事については、「体育大会」「もちつき大会」「感謝の会」「命について考える日」など、年に3回以上の設定を行った。 ・まちこみメールの登録率は100%であった。	・地域住民の方に、学校の教育活動や児童の頑張っている様子を今以上に理解し、関心をもていただくようにするために、校内掲示板やHPなどの活用を活性化させる。
		幼保小中連携の推進を図ることができたか	・幼保小連携においては、交流会(低学年との交流・体験入学)を1回以上行う。 ・教科指導、生徒指導の視点をもった小中交流会を年3回以上開催し、小中連携を推進する。	・幼保との連絡協議会、中学校との交流会の場だけでなく、授業参観の機会を活用し、具体的な情報交換を重ねる。 ・みやき町内小中学校の校内研究における講師招聘の共有を図る。	B	・現1年生が、次年度の1年生を招いて、小学校での勉強の紹介や校内の案内をする交流会を年1回以上行った。 ・教科指導、生徒指導の視点をもった小中交流会を年3回以上実施した。 ・今後は、生徒指導や教科指導(学び)において、小中共通の柱を明確にし、小中連携を一層充実させたい。	・三校合同研修会を年3回設定する。 ・生徒指導や教科指導(学び)において、小中共通の柱を明確にする。
		教育活動の広報に努めたか	・学校便りを月1回以上発行し、学校の様子等について家庭・地域への広報等を行う。 ・HPは月に1回以上情報発信のため更新する。	・新聞・テレビ等の取材を積極的に受け入れ、広報に努める。	B	・学校だよりを月に2回程度発行し、学校長の方針や願い、子どもたちのよさや頑張り等について、保護者や地域の方に周知し、学校の教育活動への理解と協力を願った。 ・命について考える日等において、新聞・テレビ等の取材を受け、学校の取組を情報発信することができた。 ・学校ホームページについては、月1回の定期的な更新ではなかったが、学校行事等での子どもたちのよさや頑張り、学校だより等を適宜掲載することができた。	・学校ホームページや学校だより等により、今後も、家庭・地域への広報に努め、学校の教育活動への理解・支援の充実を図っていく。
教育活動	地域人材を積極的に活用することができたか	・生活科や総合的な学習の時間において、地域の方々と連携した取り組みを各学年1回以上は実施する。	・各学年、計画的に地域の方々と連携し、ゲストティーチャーを招いた取組を行う。	B	・地域の理解と協力によって、校外で充実した体験学習を行うことができた。 ・地域と連携した取組を設定できなかった学年があった。生活科や総合的な学習の時間において、全体計画や各学年の年間計画を見直し、本校での地域連携の学習活動を充実させる必要がある。	・新学習指導要領の全面実施に当たって、生活科や総合的な学習の時間において、全体計画や各学年の年間計画を見直し、本校での地域連携の学習活動を充実させる。	

⑥健康で明るい教師が高きに和す学校づくり							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	業務の効率化・役割分担の適正化を図ることができたか	・平日(金曜日以外)は19:00までに、定時退勤日(金曜日)は17:00までに全職員が退勤する日を80%以上にする。 ・時間外勤務については、前年度より10%削減を目指す。 ・特定の職員に業務の負担が偏らないよう役割分担の適正化を図る。 ・全校に係る業務や様々な事案への対応については、全職員で取り組む。	・平日や定時退勤日の退勤時刻を、予め全職員に周知し、管理職自らが守るように心がける。 ・一人一人が業務改善の意識をもち、業務の効率化について考えるよう、個に応じたアドバイスを行う。 ・年度の途中でも、特定の職員に業務の負担が集中していないか観察し、課題がある場合は改善する。 ・全校に係る業務や様々な事案への対応については、全職員で取り組むように、管理職等が声を掛ける。	B	・平日は、19:00までにほぼ全員が退勤できた。定時退勤日(金)に、17:00までに全職員退勤することは、現実的には難しかったが、職員への意識付けとしては今後も有効であると考える。 ・時間外勤務時間を前年度より10%削減することについては、実現できなかった。 ・校務分掌を考える際、特定の職員に業務の負担が偏らないよう役割分担の適正化を考慮した。 ・全校に係る業務は、全職員で取り組むようにし、担当職員の負担を軽減した。	・学校における働き方改革について、みやき町の方針の趣旨・内容等を全職員が理解し、業務改善に努めていく。 ・引き続き、定時退勤日を設定するなど、職員の意識向上を図る取組を推進する。 ・行事や今までの業務について、その目的・内容を適切に振り返り、教育活動の充実の視点からも、通知表の改善や行事の精選等に取り組む。 ・児童の登校時刻や電話対応時間について、みやき町立小・中学校で統一した対応をとる。

本年度の重点項目に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●志を高める教育	・自らの夢や目標の実現に向けて努力するために必要な生きる力を育成する教育活動の推進に努めたか	・自らの夢や目標の実現に向けて努力しようとする意欲が高まったと答える児童を80%以上にする。 ・授業の振り返りを実施し、「わかった」「自分でできた」と評価する児童を80%以上にする。 ・授業力向上に向け、全教員が授業公開、授業研究会を1回以上行う。	・全ての教科等、学校行事等を通して、夢や目標について自ら考えさせる時間や場面を設ける。 ・授業の振り返りを毎授業実施する。 ・研究主任が中心となって、授業力向上に向けた研究授業を計画し、相互参観と授業研究会を実施する。	A	・児童用アンケートで、「授業などで、難しそうな問題だったり、大変そうな活動だったりしても、できるようになると進んで取り組んでいますか」の項目で、肯定的な回答をした児童は94%であった。 ・児童用アンケートで、「授業は、よく分かりますか」の項目に、肯定的な回答をした児童は97%であった。 ・全担任による1回以上研究授業、授業研究会を行い、授業改善及び指導力向上に向けた取組を行うことができた。	・開発的生徒指導の理念を全職員が理解し、委員会活動や係活動などにおいて、「出番・役割・承認」の取組の充実を図り、児童一人一人の自己肯定感を高め、主体的・実践的な態度を育成する。 ・キャリア教育の学習活動において、児童一人一人のよさや可能性を見つけ伸ばす指導(取組)を全職員が意識して行っていく。

●は共通評価項目、○は独自評価項目

4 本年度のまとめ・次年度の取組(◇成果 ◆課題)
<p>◇児童一人一人のよさや可能性を見つけ伸ばす学級経営のもと、校内研究を通じた授業改善を行うこと等により、全国・県調査では、5年社会科「思考・判断」を除き、4教科・全領域において全国・県平均を上回ることができた(5年社会科「思考・判断」は県平均をやや下回る結果)。</p> <p>◇電子黒板等の機器を活用した授業実践は、児童一人一人の学習意欲の喚起や基礎・基本の定着等、個に応じた学習活動の充実にたいへん効果的であった。</p> <p>◇年間読書冊数については、図書館主任や司書を中心とした魅力的な図書館イベントの開催や児童への呼びかけ等の取組により、1月末までに、9割以上の児童が目標冊数を達成することができた。</p> <p>◇学校評価の児童用アンケートで、「学校が楽しい」と答えた児童は9割以上であった。個に応じた指導の充実や友達の良い所を目指す取組等による成果と考える。</p> <p>◇学校評価の保護者用アンケートで、「授業参観、学級懇談会、PTA活動などに進んで参加しているか」の項目で、肯定的な回答をした保護者は9割以上であった。今後も、家庭・地域と協働した取組を充実させたい。</p> <p>◆児童の主体的な態度の育成については、今年度のがん教育に係る研修の成果である「教育活動を『点』ではなく『線』で捉える」ことで、教科等横断的な視点で小学校6年間の見通しを持った指導を行っていく必要がある。</p> <p>◆開発的生徒指導の理念を全職員が理解し、委員会活動や係活動などにおいて、「出番・役割・承認」の取組の充実を図り、児童一人一人の自己肯定感を高め、主体的・実践的な態度を育成する。特に、ボランティア活動の充実を図る。</p> <p>◆ヘルメットの着用や防犯ブザーについては、各種会議やお便り等を活用した保護者・地域への啓発とともに、学級指導の時間を中心とした安全教育の充実を図る必要がある。</p> <p>◆小中連携については、三校合同研修会を年3回設定し、その内容を充実させるとともに、生徒指導や教科指導(学び)において、小中共通の柱を明確にして、連携強化を図る必要がある。</p> <p>◆新学習指導要領の全面実施に当たって、生活科や総合的な学習の時間において、全体計画や各学年の年間計画を見直し、本校での地域連携の学習活動を充実させる必要がある。</p> <p>◆今後も、学校における働き方改革に係って、行事や今までの業務について、その目的・内容を適切に振り返り、教育活動の充実の視点から、通知表の改善や行事の精選等に取り組むとともに、職員一人一人が自身の業務改善に努めていく。</p>